方向　第二二号　一九八三年二月三日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徒寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（五）

赤谷明海

〈※昭和十九年十月二十二日の記事につづく〉

○病室窺見〈きけん・のぞき〉　〈日付なし。娯楽室から病室に移ったらしい。〉

○すぐ左にあるのがN一等兵。武昌病院の十二号ノ六に入院したとき、すぐ前にあた事を憶えてをり、南京へ後送の途次行動を共にしてからは、奉天行、同病院内、すべて自分の側を離れない男。秋田生れで秋田弁丸出しの顔面男。幾分気が小さく〈反面〉にくめない程純なところがある。小学校すら出てゐずの全くの文盲。それで自分が絶えず秘書役を相勤める。慢性胃病で吐く呼吸がとてもくさく、よくいびきをかくのは弱るが、人の心の兎角きたない事を思ひ知らされる現況では秀逸の部類に属する。

○K.N.一等兵は自分に飯と煙草の交換を提議する。腹がへつて堪へられないさうな。これは秩父の産、機屋の小僧。容貌は眼が大きく上唇部がせり出し、胎児に似通つたところがある。それかあらぬか、言動に未熟さが多く、脳天ファイラー的〈頭がおかしい〉なものを時々表明する。

○その隣りのNの二等兵、これは兵庫県小野中の教諭で皇学館出身。年令〈とし〉もとつてゐるのでぢぢくさ

くはあるが、それだけに相手を説得するのも巧みである。この先生と話をすれば、さすが投合する点も多いが、食事分配の時に、量が多ければ隣人の分にも平気で手を出すのにはいや気がさす。

○東京出身のK.H.一等兵。小人物の代表的な、都会人の浅薄さの代表的な、えらそがりの代表的な、といつた男。これも又いやしい。N一等兵に飯をくれくれと絶えず言つてをり、或時などは平手で食器の飯をべちやりと圧へおさゝへ、その上に入れてくれと差出すのを見て、はき出したい程の嫌悪を感じた。言動は所謂へいわゆる〉でたらめであり、何を言ふか判らない。首尾一貫性のないのは勿論である。敵弾の下をくぐりもしないでくぐつて来た様な事を言つてはN.G.上等兵から痛烈な皮肉を頂戴し、大豆がどんな草木に生ずるか知りもせずに、それについて得々と弁じては又N.G.氏より痛棒をくらふ。先日赤坂へ手帳6の住所録に記す赤坂宗雄氏であろう〉の「哲学の実果」なる本を借りてゐたのを、小生一寸へちょっと〉手にして見たところ、著者のディーゲンズへディーツゲン。ドイツ人。唯物論者。〉なる人は赤化思想系の人物らしいので、先生に「あんたこれ判りますか」と訊へき〉いたところ、大いに奮慨しての曰く、「勿論わかるさ、俺はかういふ本が好きで何時も読んでゐたのさ」と。そして時代錯誤な外国哲学者の説明を始めた。愉快である。

○室長はH班長。関東の某会社の小使さんである由。それを明々と皆に言へるところ、優れたものを有つてゐる。

○今一人の班長殿○伍長は、年少の故もあつてか甚だ勝手へ我儘〉である。二六時中の大半、自ら診療軍規を破りながら、極へご〉く一時的にそれを守るときは、他に対してその厳守を強要する。

○室中で一番尊敬出来るのはN.C上等兵（中原次郎氏であろう）である。無駄口はきかない。きけば必ず簡単にして適切。如何にも頭脳の明晰さを表明してゐる。東京の品川に生れ、どちらかといへば貧しい家に人となり、夜間中学校を苦労して卒業したらしいが、苦学生らしい影は全然ない。現在二十五才で、四才の時大震災に逢つたさうだが、その時の印象等を話すのを聞いてゐると、その鋭敏な感受性がすぐ此方に響いて来る。社会の話、自然の話、人間の話、その話の中に窺はれる氏の人物は温かく大きい。かういふ人と同じ中隊にゐれば必ず親しい間柄になれるだらう事を思ふ。

○人のあらをさがせばきりがない。きたなくけがらはしい。他人を責める目を以て自分をも責めれば、矢張りきたなくけがらはしい。然しながら、自分には自制といふものがある。自らを教養人として高く買ふ自尊心がある。たとへ他人と同様腹がひもじく、煙草が喫ひたくても、だからといつて、他人がいぢましくも我勝ちに多量の食器を求め、喫ひ捨てられた煙草を拾つて喫ふ様な態度はとれない。

○生きて故国に帰へらば

生きてわれ故国へくに〳〵にかへらば何はさて我が家の井戸水飲みてし飽かむ（一〇・二七）

○唐寺

応量坊庭の薄苔露光り人気なきまま朝の日は出づ（一〇・二九）

○無題、（前出「幽遠なる幻想」の焼き直しか）

峡道のつきし奥処へおくど〳〵に池ありて隅へ隈〳〵なく照れる秋の真昼陽へまひるび〳〵（一〇・二九）

以上が整理番号5の手帳から転写したもの。右から左から時に応じて書きつけたり、後から前の余白を埋めたりしているので、確実に月日の経過を追っているとはいいかねる。菓子の製法を省いたり、罫線をはみ出て書いたのは、一冊の「とゝもしび」へ※この記事を筆写したノートの名〻に収めきれまいと思ってのこと。ここまで来て余白にゆとりがありそうにも見えるが、何分次の手帳の分量が多いので気はゆるせない。とじ目に近い行だけ空けることとする。

（整理番号6）手帳

7×12 5cm。六帖綴じ。黒表紙。表に「昭和十九年」「二六〇四年」裏に星のマークをプレス。左開き。扉に石清水八幡宮の写真を印刷。前の5手帳より部厚い。

この手帳を何時から携帯していたか全く記憶しない。真中に「住所録」の欄があり、その中に棚山茂の名をとどめている。然し既出のように、棚山氏とは十九年八月十八日の記で別れているので、武昌では既に持っていたことになる。内地から持参したのであろうか、誰かから贈られて。すると、5と6の両手帳を常に所持していたことになる。

昭和十九年三月十二日　中部第二十三部隊へ入営

同年四月二十七日　新軍旗拝受、歩兵第四十四師団第九十三連隊創設サル

同年五月二十五日　召集解除退営

同年六月　四日　臨時召集ニテ中部第二十三部隊入営　同日津村別院ニ宿泊
同年六月　十日　大阪出発　神戸港ヨリ乗船
同年六月　十八日　南京着
同年六月二十六日　南京発乗船
昭和十九年六月三十日　漢口着
同年七月　九日　漢口発　武昌ヨリ乗車
同年七月　十一日　岳州着
同年七月　十三日　受診
同年七月　十四日　岳州野戦病院ニ入院（同月十九日伝病ヨリ内科へ）
同年七月二十八日　武昌陸軍病院へ転送サル
同年八月　三十日　南京第一陸軍病院へ転送
同年九月　五日　南京第一陸軍病院ニ入院
昭和十九年九月十一日　南京ヨリ奉天へ転送
同年九月　十四日　満支国境通過
同年九月　十五日　奉天陸軍病院ニ収容
同年九月二十六日　奉天陸軍病院ヨリ遼陽陸軍病院へ転送収容

同年十一月二十三日　遼陽陸軍病院ヨリ前送、奉天陸軍病院ニ収容
同年十二月　三日　奉天陸軍病院北陵第二分棟ヨリ前送
同年十二月　四日　満支国境通過
同年十二月　五日　天津陸軍病院福島街分病室収容
昭和二十年一月　六日　同所ヨリ前送
同年　一月　八日　徐州陸軍病院収容
同年　一月　十日　治癒退院
同年　一月十一日　南京着
同年　二月　一日　南京発（二月十二日九江着　三月八日九江発）
同年三月　十九日　武昌着（ここまでペン書き、次から鉛筆書き）
同年四月　二十日　第百五十九兵站病院入院（武漢大学）
同年五月二十四日　漢口第二陸軍病院第二分院へ転送
同年七月　十八日　治癒退院、病漢練成隊入隊
同年八月　二日　武漢野戦貨物支廠衛生材料課勤務
同年八月三十一日　武昌兵站分院入院（一五九兵站病院）
同年九月　七日　第一五八兵站病院江漢病室へ転送（漢口第一陸軍病院）

（十一月二十八日　伝染病室入リ）　〈これのみ赤字。補筆。

昭和二十一年二月十二日　同病院伝染病棟へ転室

同年　四月　十五日　後送ノ目的ヲ以テ漢口一陸出発

同年　四月二十一日　第百五十七兵站病院着

同年　六月二十三日　同病院出発〈上海より内地へ〉

○箸とらば天地御代の御恵　君と親との恩を味へ

箸を置く度に思へよ報恩の　道に怠りなきや如何にと

〈この歌をどこで唱えたものか、満州での可能性が大きい。〉

◎十月六日付森田曠平端書（十五日受）　〈始めて内地からの便りを受けた

貴兄の第一信本日十月六日拝見し驚喜してゐます。といふのは我々の間では君は既に冥界の人だつたからで。杉田〈荘作〉が一番にいらぬ報告をし我々はそれを確聞として信じ、五条の森本孝順師にまで聞〈きこ〉え、それから同師が同地で得た情報で、九分九厘まで君は亡いものと信じてゐた。原田〈憲雄〉が君の居所を知つてゐた出だが、大塚先生〈五朗〉にさへそれをもらへ〈※原漢字〉すことなく、先日伺つた時も君の話しで悲観してゐたのだ。原田の馬鹿正直な秘密主義に憤りを感じてゐる。ともあれ吾々一同の悲痛は一変して驚喜と変じたわけで、めでたしめでたしである。「おのが計を知らずに君は飯を食ひ」

今日は風邪で臥してゐたのだが、君の便りでとび起きて、とりあへず唐招提寺へ電話しました。福　永君へ孝円〉と森本さんがかはるがはる電話口で喜んでゐられました。それから大塚先生へも君は出したと思ふのだが、篤さんにも電話をかけ、先生に知らせてもらふやうに依頼した次第です。北浦氏へ良子〉がひとりで興奮してぐづぐづ云つてゐます。小生は最後まで文化報国で頑張る決心ですが　この頃は軍人会の役員を持たせられてその方でも相当以上に御奉公してゐます。どうかどうか御自愛の程を。又お便りします。貴兄もお暇あらば出して下さい。

〈杉田・原田・宮崎・北浦は森田と共に大塚五朗主宰の一艸舎へいっそうしゃ〉同行。それまで出した便りはすべて着かず、遼陽からのものが着いたわけ。遼陽以後は音信不通。

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（五）

原田憲雄編

〈一九三六（昭和十一）年三月三十日午後消印。はがき。住所なし、夜来山房主人。墨書。

先日は御来訪被下有難御礼申上候　小生あの時の風邪がこぢれ未だ臥床致　居り候間再度御来遊御願致度御待申上候　尚その節先日の草稿御待参賜はらば幸甚に存候　本年は市展不出品決心致し候以下拝眉の上不既

四　月　二　日　午前消印。はがき。住所なし。

二通も君より玉簡をもらつて返事も出さず失礼した。沢田さんの所へ行つてゐるのでクタクタになつて何も出来ない。本当につかれる。（帝展招待券あとからおくる）

君は水甕へ短歌結社・尾上柴舟主宰〉へはいる気はないか　大塚へ五朗〉さんもなるべくならはい　つたらい、。無理にとはいはないが……。と言つてゐた。僕も多マへ多磨・北原白秋の短歌結社〉の方がすきだが水ガメの方にしようかと思ふ。

これの返事至急たのむ。毎月五十銭出せばい、わけだ。つかれはて、ゐるのでこれで失礼。君の手紙の用紙五枚になつたら不足税をとられる。むらさきの麻の模様の着物きるをとめは月をゆびざしにけり。

四　月　五　日　付、午後消印。てがみ。水干町。

お手紙ありがたう。

水甕にしてもい、とのこと　君の歌は矢張り多摩へ磨〉風だが　大塚先生がゐられることだし　さうしてもい、わけだ。しかし先生も無理にとはいはない方がい、と言つてゐたから　充分熟慮し給へ。一生の歌風の決るときだからね。

水甕社規同封しておいた。つまり一円五十銭出せばい、わけだ。それに原稿用紙料三〇銭　合計一円八十銭になる。

僕も桃山へ沢田宗山氏の陶房〉から帰ると　実につかれて何もくそもあつたものぢやない。歌も作れたものぢやない。全く陶器の方一点ばかりになつてしまふ。しかし出来るだけ　少しづつでもい、から　作つておかうと思つてゐる。

僕は　水甕へ送るのは　はじめ添削歌稿にしようと思ふ。それを三ケ月なり半年なり続けて　それから投稿にし

たいと思ふ。それまで作歌が持続出来るか出来ないかが疑問だが。

川田順の伎芸天（第一歌集）をみつけた。君もぼんやりしてゐる。君と前一緒に行つた二商〈京都市立第二商業学校〉の横の「水かがみ」を売つてゐた店に四〇銭で売つてゐたのだ。驚いたか？　二円は充分するものだ。君の縄ばりをあらした様だがまあかんべんしてくれ。今日はこれでやめる。枯魚よ泣くなかれ。

なやましく　きたあを遊ぶ　洋妾（らしゃめん）の耳の飾の　ゆる、宵かな。以上。

枯　魚　大　人

僕は都会の哀愁を歌つてみたいと思ふ。

飾窓のマネキン人形はさびしかりわっとよせたる自動車のむれ。

小生長いものは書けないが君の手紙をみるのはなつかしい。うんと書いてくれ給へ。

四　月　十　四　日　夜付、十五日午前消印。はがき。伏見区丹後七　小山方。

伏見へ来た。〈陶房へ通う便宜による移転である〉

大塚先生からなにも便りがないのでどうしたのかと心配してゐる。君一度行つて水甕の方を僕が心配してゐたと言つて呉れないか。それから先日言つてゐた森田直一といふ男の所へ一度手紙を出してみないか。（左京区浄土寺馬場町二九亀尾すゑ子方）僕の方からも言つておく。こちらへ来てもいそがしくて中々〈短歌〉作品がない。手紙も書くひまが少いのだ。君からは長いのをカンゲイする。

四　月　二　十　四　日　伏見局、午前消印。はがき。住所なし。

玉簡今拝見した。君も水がめの方へ紹介していただく由よろこばしい。　小生の暇な時と言へば第一日曜と第三日曜としかない。だから　もし遠足をするならば来月の第一日曜がいゝと思ふ。何なら君と直一君と先生の三人で近く行かれたらどう？　来月の第一日曜迄待つて呉れるのなら行く。処はなるべく金のかゝらぬ所がいゝ。大原の三千院　寂光院を経て阿弥陀寺等へ行つてもよからう。それか雲ケ畑なんかどうだらう。貴船クラマもいい。カニマン寺なんかどうだらう。カニマン寺は先生が行かれた様だが。とにかく君のプラン聞かせてくれ。直一君のも聞いてくれ。

生田蝶介　どういふ派の人でどんな経歴の人か知らしてくれないか。

四　月　二　十　五　日　　伏見局、午前消印。はがき。住所なし。

水嶺社から石井直三郎へ尾上柴舟の高弟〻の死んだ通知があつた。

さてハイキングコースだが、六地蔵の後ろの山を越えて宇治川の上流へ出てそれから宇治川ラインを下るのが面白くないか。立木の観音とかがあるさうだ。里程は六　七里、立木へまはつたら八、九里だ。金は六地蔵までが二十一銭、帰りは宇治からだから二十八銭になる。（計四十九銭）なるべく金がかゝらない様にしたいが、その位は止むを得ないだらう。それとも他に何かいゝ考へがあるか。知らしてくれ給へ。返事をまつ。

四　月　二　十　九　日　　夜付、三十日午前消印。てがみ。小山方。

随分長くこんな風な手紙を書かなかつたね。君も暇がないさうだが、お互様に遠ざかりすぎた様だ。少しもつと歌なんか送つてくれ給へ。君は僕より時間を持つてゐる筈だよ。

森田直一といふ男の歌はどうだ。うまい歌を時々作るがまだまだ下手だ。〈浅沼〉大助より少しましだらう。（こんなこと彼にしれたらいけない。）少し歌を気どつてよみすぎてゐる感じがする。しかし目はよくこえてゐる。今　下に書いた歌は無理して作つたのだ。つまりひねり出したのだ。大がい　作るのがいやになつてずぼらをする日が多い。一日約一首。作らない日もある。うまくならないのもあたゆまへだ。うまい歌よみの作をみると・・・しやくにさわる。

この頃、ニヒリズムにおちはしないかと自分自身あやうんでゐる。そんなことから　自由律の歌を少し作つてみた。少し作つてみると自分の感情をさらけ出すことが出来る様な気がする。そして三十一文字の歌が何か窮屈に見える。枯魚よ。自由律の歌だけは作るなよ。

○おおこれこそ本当の自由だ。自由な歌だ。（歌と言へぬかも知れぬ）

朝のミルク　かわききつた道。　あゝこゝにも白い憂愁がある。

ふらう・ぞるげよ！　私はお前を見た。憂愁に中毒した面は三角錐の様だ。

女よ。ぎたあを弾いてくれ。俺は泣きはしない。

ホトの白毛をぬきて捨てけり？　茂吉、貴様も歳をとつたなア。

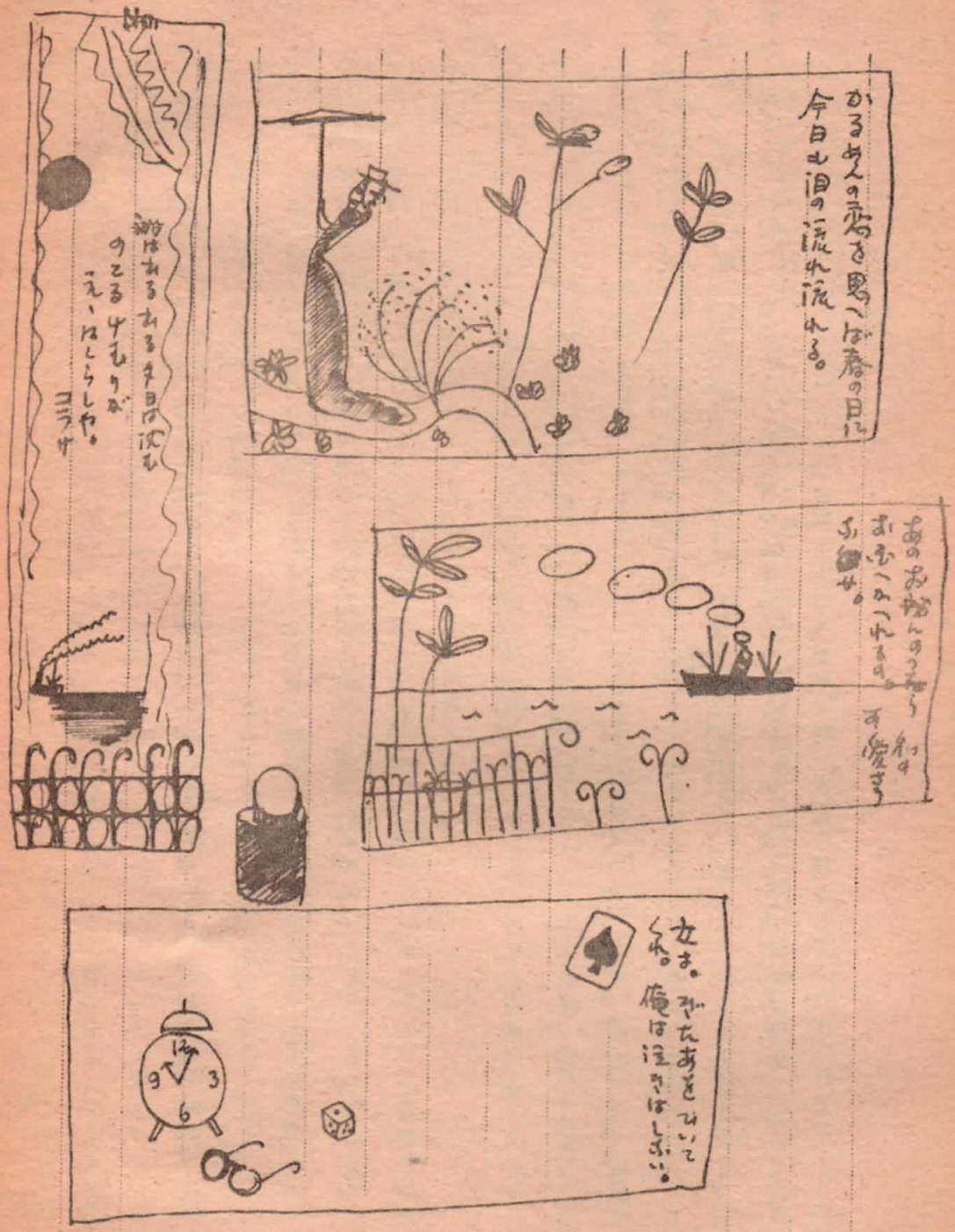
たんぽぽが咲いた。赤い着物の女の子　笑つてる。

交合の後のはかない征服感。足らひ切つた女の唇。私は静かに接吻する。

春の夜は女のホトが恋しくなります。それは誰でも同じことです。

ほとばしる血　白い乳房　カルメン！　おお　俺は人を殺した。
おお　あどばるんよ。強姦した翌朝のすがすがしさ。
生殖細胞は春の夜狂奔する。茂吉のはA型。夕暮のはB型。晶子のはC型。それを全部ぶらすして　OPORT
をこしらへて飲んだらうまいだらうなア。
赤い月。私は女をじつとだいてゐる。女はそつと目をつぶる。おお私はどうしたらよいのだ。
紅い月。岡の上の洋館では肺病やみの少女が恋文をかく。電線に風がなる。
丘のみちを帰りて来ればかすかにもふくろしば鳴く夜のほどろかも。
せうせうと風つのり来ぬまなかひの山なみたてる星月夜かも。
との曇る野のさいはてにしろじろとかすかに昇る野火の畑かも。
なぐはしき醍醐の春やはしきやし若かへるでの花のかそけさ
（以上の如し。君も見せるセキニンあり）

遠足は十七日がよからう。新緑がいゝに違ひない。
今ほしくてたまらぬガラス絵がある。明治よりずつと前のものだ。
歌はどんどんくれ給へ。なんとなく君の歌をよまぬとさびしい。いゝのが出来ただらう。
〈このあとに「花よりダンゴ」と「茂吉がホトの毛をぬく時　どんな顔をしてゐただらうなア？」の説明をもつ絵は紙面の都合で省略する〉


かるめんの雫を見つめば春の日に
今日も涙の流れ流れる。
海はあるあるある日は沈む
のこるゲムリが
こえ、はとうしゃ。
コラサ
あのお嬢さんのうしろ姿
おむこさんにれるの。
ふ愛さう
女よ。ぎたあをひいて
くれ。俺は注きはしない。

中興頌 ―李清照（四）―

原田憲雄

一一〇〇年、李清照十七歳、前後の作といわれる詩に「浯溪中興頌詩和張文潜」（浯溪の中興頌の詩、張文潜に和す）二首がある。詞ではなく、詩である。それだけに彼女の思想、別のことばでいえば思考の方向や態度、がはっきり出ていて、彼女の多難な生涯や、その本色とする詞に表現された情感の根拠を何う参考となろう。

浯溪はいまの湖南省衡陽地区の祁陽にある。唐の詩人元結（七一九？―七七二）が七七一年に、その石崖に刻ませた「大唐中興頌」は、元結の文、顔真卿の書、ということもあり有名で、後人の唱和も少くない。東坡門下の四学士のひとり張耒（文潜は字、一〇五二―一一一二）が「中興頌の碑を読む」（『張右史文集』〈四部叢刊本〉巻八）詩を作り、清照がまたこれに和した。第一首は張の詩の韻字をそのまま使う。まず元結の文。

天宝十四載（七五五）安禄山が洛陽を陥れ、翌年長安を陥れた。天子（玄宗）は蜀（四川）に行幸し、太子は霊武（甘粛）で即位された（粛宗）。次の年皇帝（粛宗）は軍を鳳翔（陝西）に移した。その年、両京をとりもどし、上皇もみやこに還られた。ああ、前代の帝王で盛徳大業あるものは必ず歌頌に表現されている。いまこの〈中興の〉大業を歌頌し金石に刻むことは、文学に老熟した者でなくて誰に出来ようか。さてその頌。ああ前の朝廷の、悪臣おごり、わざわいなし、辺将兵をはせ、国を乱し、人民は平和を失った。大駕は南巡し百寮さまよい……。皇太子、軍を総べ、群凶をうちはらい……、宗廟再び安く、二聖（天子と上皇）歓びを重ねた。……湘江のほとり、浯溪の中の、石崖を天が平らにした。君き刻んで、この頌をのべ

伝えよう、千万年ののちまで。

張氏の詩は読み下しで掲げておこう。

玉環(楊貴妃)の妖血　人の掃ふ無く、漁陽(安禄山)の馬は厭く長安の草。潼関の戦骨　山より高く、万里の君王　蜀中に老ゆ。金戈鉄馬　西より来る、郭公凜凜　英雄の才。旗を挙ぐれば風となり雨となり、九廟を洒掃して塵埃無し。元功高名　誰かためにさん、風雅継がず　騒人死す。水部(元結)の胸中　星斗の文、太師(顔真卿)の筆下　蛟竜の字。天　二子をして将来伝へしめんと、高山十丈　蒼崖を磨く。誰か此の碑を持して我が室に入り、我をして一見せしめば昏眸開かん。百年の廃興　嘆慨を増す、当時の数子今いづくに在りや。君見ずや　荒涼たる鄠水に棄てて収めず、時に遊人ありて碑を打ちて売る。

次に清照の詩を拙訳して。

五十年の治功も稲妻のようかき消えた、華清宮の柳　咸陽の草。五坊の供奉(ぐぶ)や鬬鶏手にかこまれ、酒池肉林にへ玄宗は〉老いも知らなかったが。胡兵がふいに天上からやって来る、反逆の胡人だって乱世の姦雄だ。勤政楼前を胡馬ははせ、珠翠は踏みにじられて塵あくた。官軍が出陣してはぼろ敗けしたのは、霊枝(れいし)の運搬に多くの軍馬を死なせたからだ。堯・舜の功徳は天のようなもの、どうしてこせこせ文字でもって記せよう。碑にあらわし徳をしるすなんてほんとにくだらない、だからこそ神鬼に山崖を磨滅させたのだ。鄭子儀や李光弼は気づかなかった、天子の心が禍を悔いるとき人民の心が開くのを。夏・商の古代にかがみがある深く戒むべきだ、歴史にしるされ今もつぶさに存在する。君よどらん　当時張説は最も機

敏な男だったが、生きながらまんまと姚崇に〈碑文を〉売らされた。

君よごらん　人驚かせる興廃を天宝の事変に伝える、中興碑上にいま雑草の生いしげるのを。国に負いて姦雄のいたことは知られず、ただ成功と国老尊重を説く。誰が貴妃を天上から来させたか、虢国・秦国・韓国の三夫人はみな天成の才貌だった。花やぐ山桑・羯鼓・玉笛・方響の音に、春風わたって埃もたたなかった。このとき誰が思ったろう安禄山や史不明の姓名を、健士・猛将はどうして眠りこけていたのだろう。天に真近かの抱甕峰、峰巒にきざみ出だした「開元」の文字。時移り勢い去ればまことに哀れ、姦人の心の醜くさは崖のように深い。西蜀万里に流浪してもなお返りえたが、南内がいちど閉鎖されたらいつ開放されよう。あわれ孝の徳は天のように大きくとも、かえって将軍に「元気かね」といわせたものだ。ああ奴ばらに李輔国の専権・張后の尊大が言えなくても、春のなずなを長安で計り売りしていたことは思い出させた。

ふんだんに故事が使ってあるので、訳文だけでは分りにくい。原文をあげて解説してゆこう。

五十年功如電掃　華清宮柳咸陽草　五坊供奉鬪鶏児　酒肉堆中不知老　〈掃・草・老が韻字〉

唐の玄宗の在位は七一二―七五六で四十五年だがざっと「五十年」といった。かれは七二三年、都長安の郊外の驪山に温泉宮を置き、七四七年華清宮と改め、たえずここに遊んだ。咸陽は長安の西北、秦の始皇が都した所だが、唐の都長安を指していうことは詩文によくある。五坊は天子が狩に使用するタカや犬など五種類の鳥獣を

扱う技手を置いた官舎。供奉は天子の側で用をつとめる者。かれらが天子の愛を頼んで横暴ぜいたくであったすがたは唐の小説「東城老夫伝」などでうかがえる。玄宗は治世の前半の開元年間には精励したが、後半の天宝年間には楊貴妃におぼれ遊楽にふけったことはよく知られる。

胡兵忽自天上来　逆胡亦是姦雄才　勤政楼前走胡馬　珠翠踏尽香塵埃　〈来・才・埃〉

胡は中国からいって西・北方の異民族。ここでは安禄山、ついで史思明をさす。安氏は玄宗に愛されたが、反乱したので「逆胡」という。「姦雄」は次の故事にちなむ。魏の曹操が許子将に「おれはどんな人間と思うか」と問い、許が「あなたは治世の能臣、乱世の姦雄だ」と答えると、曹は大笑した。勤政楼は「勤政務本之楼」の略称。玄宗が開元中、興慶宮の南に建てた。その玄宗が政を勤めず本を務めなくなった天宝の末年、安氏の軍が楼前に侵入し、宮殿を飾る珠玉を踏みにじった。

何為出戦轅披靡　伝置荔枝多馬死　堯功舜徳本如天　安用区区紀文字　〈摩・死、字〉

「披靡」は退却。貴妃がレイシが好きだったので産地から駅伝で急送させたので味が変らなかったが、馬が多く死んだ。堯・舜をたたえた古代の碑はない。かれらは神話の帝王で実在しないのだから当然だが、清照の時代にはまだそうは考えず、倫理的に解釈した。石に功績を刻むことは秦の始皇がはじめらしく、碑とよばれるものは漢代に入って現れる。

著碑銘徳真陋哉　迺令神鬼磨山崖　子儀光弼不自猜　天心悔禍人心開　〈哉、崖・猜、開〉

「神鬼」の句は難解だが、古代に堯・舜の徳を石に刻むものがあったとしても、天が神鬼に命じてその山崖の

文字を磨滅させたのだ、というのであろう。郭子儀・李光弼は安・史の乱平定に功のあった名将。かれらはその平定を己の功と思っているかもしれないが、実際は天子がこの禍を己の責任だと悔い、それが人民たちの長い鬱憤を解放したためだ、というのが「天心」の句意。

夏商有鑑当深戒　簡策汗青今具在　君不見当時張説最多機　雖生已被姚崇売　〈戒、在、売〉

「簡策汗青」は史書というほどの意。姚・張二氏は開元の宰相だが仲が悪かった。姚は病が篤くなると子らにいった「張とは仲がよくなかったが、おれが死んだら同僚として弔問には来るだろう。そのときおれの服や宝帯などを帳前にならべておけ。もし顯みもしなかったら、できるだけ速く家事を始末しろ。しかし彼は服装などにぜいたくする男だから、見てみるだろう。そしたらすぐ父がさし上げたいと言っていました、といって贈り、神道碑（墓門の碑）の文章を頼むがいい。書いてくれたら即座に天子のお許しを頂き、すぐ刻めるよう石を準備させておけ。彼は数日後、ひきうけたことを悔んで「少し訂正したい」などいって取り返しに来るはずだ。そのとき、もう上聞してしまったと答え、使の者に刻った石を見せるがいい。姚が死ぬと果して張が弔問に来て服などを顯みた。姚の子は言われた通りし、張は姚のため讃辞たっぷりの碑文を書いた。あとで取りもどしに行ったが間に合わず、姚めにすっかり計られた、おれはあいつにはとても及ばぬ、と嘆いた。

以上が第一首。「古詩」のスタイルだから韻のふみ方は「律詩」のようにきっちりせず、ずれたふみ方がしてある。〈　〉内の説明で、「・」でつないだのは同韻、「、」でつないだところはずれている。次は第二首。

君不見驚人奏興伝天宝　中興碑上今生草　不知負国有姦雄　但説成功尊国老　〈宝・草・老〉

天宝から上元にかけての人を驚かせた大唐帝国の廃興の事実、粛宗の中興をたたえた碑に二百五十年後のいま草の生えてみるがいい。碑を刻ませた人も、追和する人も、その廃興の真の原因を知らない。国家の破壊は、安・史のような逆賊のせいにしているが、彼らはいわゆる「乱世の姦雄」であって、もし世が治まっていたら「能臣」だった。唐朝を開いた高祖・太宗も前朝からいえば逆賊、乱世の姦雄だったではないか。そのような理義さえつかまず、中興の業の成功と老熟の宰臣や豪将の尊重を説くだけだ。

誰令妃子天上来　虢秦韓国皆天才　花桑渇鼓玉方響　春風不敢生塵埃　〈来・才・埃〉

ひとはしばしばあの大乱を楊貴妃たちのせいにする。だがあの美女を天上から地上に来らせたのは誰だったか。彼女とともに非難されるその姉妹の虢国夫人・秦国夫人・韓国夫人もみな天成の才貌をもつ人だった。才貌はそれ自体、悪ではない。ふさわしい場所にその才貌を発揮させさえすれば、どれほど多くの人々に歓喜をもたらしたことだろう。乱世の姦雄が治世の能臣として役立つように。げんに彼女たちがそれぞれの楽器をとって演奏すれば春風わたって塵あくたも起たなかったではないか。「花桑」は山桑の誤りか、と注家がいう。山桑・羯鼓・玉笛・方響はいずれも楽器の名。玄宗はかつて夢に十人の仙女を見、また竜女を見たので、それにちなむ作曲をし、宮中で玄宗はじめ貴妃らで合奏した、と小説が伝える。音楽は悪ではない。「楽は政に通ず」というのが中国政治哲学の伝統だった。音楽を成立させる調和の感覚を政治に活用せよというのがその原理だ。玄宗は音楽にくわしく、治世の前半にはその原理を政治に生かし得たが、後半にはすでに忘れ、音楽を己の感覚の惑溺の具とはしても、政治を調和する原理とはしなかった。

姓名誰復知安史　健児猛将安眠死　去天尺五抱甕峰　峰頭鑿出開元字　〈史・死、字〉

天子が惑溺しているとき、偽似の平安繁華に酔う人たちは、「治世の能臣」から「乱世の姦雄」に移行つつある者としての安・史の姓名に気付く者はなかった。軍隊もまた「太平」のうちに眠りこけているだけだった。

長安の東約一〇〇キロに太華山がある。玄宗は殊にそびえ立つ甕肚峰を嘉賞し、峰頭に「開元」の二大字を刻み百余里から望見させようとし、諫官の上言でとりやめた。「抱甕峰」は「甕肚峰」の誤りだろうと注家がいう。

時移勢去真可哀　姦人心醜深如崖　西蜀万里尚能反　南内一閉何時開　〈哀、崖、開〉

玄宗が安氏の乱で都をのがれ四川の成都に達したとき前方の大橋を見て何という名かと問い、「万里橋です」との答えを聞き、かつて僧の一行から「陛下は万里に行幸されても御無事です」と言われたことを思い出し「これで安心だ」といった故事にちなむのが「西蜀万里」の句。

玄宗が成都にいる間に皇太子が即位した。玄宗にとっては事後承諾をおしつけられた形だった。上皇として長安に帰った玄宗は南内で起居した。唐都長安には、大内・西内・南内があった。南内は玄宗が皇帝となる以前の邸を即位後「興慶宮」と名づけ開元十六年からそこで政を聴いた。大内の南にあたるので「南内」という。上皇の玄宗が、雨上りに勤政楼に上ると、楼下の市人や往来の者が集り「今日はわれわれの太平天子にまたお目にかかれた」と喜び「万歳」の声をあげた。このとき粛宗は病気であった。その側近の李輔国が「高力士らが上皇をそそのかして陛下にとってかわろうとしています」と告げ、天子の命だといって、玄宗を南内から西内に移した。道中、抜剣武装の兵を李が指揮した。上皇は驚いて幾度も落馬しかける。高力士は馬をおどらせ、声をはげまし

「五十年太平をお保ちになった天子なるぞ。お前ももとはその家臣、無礼があってはなるまい」李は思わず馬を下り、たづなを放した。高はまた上皇のお言葉なるぞ、といい「将兵たちはそれぞれ元気だったかね」そこで李は兵士に剣をさやに収めさせ、高声で「上皇様もおめでとうございます」といって拝した。高はまた「李よ馬をとれ」かくて李は上皇の馬のたづなをとり、将士が護持して無事に西内についた。李の一行が去ると、上皇は涙を流し、高の手をとり「将軍がいなかったらおれは殺されていただろう」といった。翌日、高ら玄宗の側近はすべて南方の遠地に流された。玄宗は南内に返ることなく孤独のうちに死んだ。

可憐孝徳如天大　反使将軍称好在　嗚呼奴輩乃不能道輔国用事張后尊　乃能念春斉長安作斤売〈大、在、売〉

孝の徳は天のように大きいといわれるが、父玄宗を南内から西内に移すことを許したのは、あの碑が中興の英主とたたえる粛宗ではないか。粛宗が信任した李はやがて権力をほしいままにし、粛宗の愛した張皇后も李と結んで政事に干預した。粛宗も李をいとうようになったが、どうしようもなかった。皇后はのち李と権力を争って殺された。まして他の連中にその批判などできるはずはなかった。流された高は、庭のなずなを見て「長安・洛陽では計り売りしているのに、ここでは採って食べようとする人もない」と詩によみ、煮て味わい都をなつかしんだ。批判者の口をふさぎ、高力士に感傷させたのも、みな「碑」がたたえる「中興の天子」。その碑が草に覆われてあたりまえではないか。

清照の詩は、韻こそ張氏の作に和してはいるが、趣旨においては全く張氏の批判としか言いようがない。張氏

は、彼女の父李格非の友人である。人としては親しみをもったであろう。この批判は純然たる思想批判ととってよい。

まず、張氏は元結の中興頌を全面的に肯定し、建碑を讃美するが、彼女は中興頌を否定し、建碑を天にそむくものとする。

張氏は天宝の大乱の責めを楊貴妃や安・史両氏にかこつけようとするが、彼女は天子にその責めを帰する。

張氏は貴妃らを妖女、安・史を悪人とみるが、彼女は、いずれもすぐれた才能であり、天が天子を試練するために遣わしたものとみる。

張氏は大乱平定に大功あったものを李・郭二将軍とするが、彼女は天子の懺悔とし、また乱は必ずしも平定しているとは見ないようである。

張氏の意見は、彼独自のものではなく、当時の士大夫、すなわち男性の知識人の公約数的意見だというべきもの。そうして後代のほとんど今日に至るまでの、天宝の乱に対する人々の感想を代表していると見て大過はあるまい。

李清照の詩は、そのような通念・常識に対するまことに痛烈な批判といわざるをえない。いまでは、さすがに彼女のような観点に立つ史家、さらに論証を進める人も少くはあるまいが、紀念碑の建立をも無用とする徹底性をもつ者はどれほどあるだろうか。

李清照の史観は、たぶん女性であってはじめて見出し得たものだ。しかも彼女以前にはなく、以後も同等の見

識を詩文に表明し得た女性は中国ではまれなのではないだろうか。

彼女の夫趙明誠の『金石録』三十巻の第一巻から第十巻までは彼の集収目睹した考古学資料の目録で、所収の二千点には一連番号をつけている。その第一千四百五十五から七まで は「唐中興頌」上、中、下で、「上」の下に「元結撰顔真卿正書大曆六年六月」、「下」の下に「在永州」と注する。語溪は永州に属するから、これは張氏が詠じ彼女の和した頌である。第十一巻以後のノートには、これについて記さぬから、明誠がこの頌の拓本を見たのが、彼女に出会う前だったか後だったかは分らぬが、彼女がこの詩を作ったのが前に記した時だとすれば、二人の結婚の前。欧陽修（一〇〇七―一〇七二）に始まった金石学という新しい学問分野にいどむ若々しい情熱をもつ太学生ではあっても、当時の士大夫の気風からはそう遠く離れてはいなかっただろう明誠には、彼女の思考感情は驚異的に新鮮苛烈であったに違いない。碑を無用とする観点にいたっては、彼の歩む学問の根底を震撼するものと映じたかもしれぬ。

「如夢令」にうたわれたあの溪亭のランデヴーでの二人の話題が、そこらの問題にふれていたとすれば、返るを忘れておそくなり、深みにおちいり迷ったろうともうなづける。知識感性に豊かな青年たちは、中年男女の情痴とは違った契機からも清冽な恋に陥ることができるのであろう。

清照は、明誠から見て過激であったかもしれぬが、『洛陽名園記』を著書にもつ李格非のむすめ、歴史学の資料としての金石の価値やそこに存在する美に対しては盲目ではない。彼女の感覚はその対象に敏活だった。明誠には清照の魅力が幾重にも相乗して感得されたのではなかったろうか。